

# mediopos 10

2015.6.30 ~ 2015.7.24

【神秘学ポエジー～風遊戯 第25集】

media-photo-poesie ヴァージョン

神秘学遊戯団



■リチャード・バック『かもめのジョナサン（完全版）』（新潮文庫 2015.7.）

「アンソニーは、生まれて初めて目を覚ましたような、生き生きとした感覚を覚えた。ある直感が彼の心をつらぬいた。そしてきいた。「一体、いまのは何だったんです？」「ああ、たのしく飛んでただけだよ。急降下、急上昇から、緩横転して、頂点で横転宙返り。ただの暇つぶしさ。きみもし同じように飛びたいのなら、やってみるかい？ 少しばかり練習が必要になるけど。でも素敵なことだと思うだろ？」「ええ、はい……美しいです、ものすごく！でも、あなたはぼくらの群れにはいませんでしたよね。いったいあなたは、だれなんです？」「ジョンとでも呼んでくれ。そう、ジョナサンだ。よろしく」

目をひらけば  
自由はそこにある

ただ飛ぼうとする  
それだけでいい

群れの掟はいらない  
ただ楽しむだけだ

目をひらくだけ  
ただそれだけでいい

空はここに広がっている  
樹はここに立っている

川はここに流れている  
花はここに咲いている

目を閉じたままで  
恐れているのは悲しい

教えはいらない  
いっしょに楽しむだけだ

目をひらくだけ  
それだけでいい



■岩下尚史『芸者論／神々に扮することを忘れた日本人』（雄山閣 2006.10）

「どんなものでも、種があり、根があるように、浮き草稼業の芸者たちにも、その流れを辿って行けば、白拍子、あそびめ、そして巫女という源に行き着きます。／しかし、古代の巫女というのは、女性のすべてが生まれながらにして備えていた信仰上の資格であり、何も芸者の先祖に限ったものではありません。／女兒が裳着を済ませると、自家の神に仕えるべき巫女の資格を得ると共に、一人前の女性と認められ、神の側近く仕えることで、彼女は時に応じて神のお告げを聞くことになります。そのお告げを、父親なり、兄弟に伝えることで、その家は安全に保たれもするし、また栄えもすると古代の人々は考えていたのです。」

「古代の人々は、人間の活力はタマ（魂・霊）の新鮮さにあると考えており、これが身体の中心に納まっていれば健康で、これが身体から離れて帰ってこなくなった時が死であると考えていました。したがって衰えかけた魂に活力を与えるためには、ほかの魂を自分の魂に付着させることで増強を図らなければなりません。／このように、魂を体内の納めるべきところへ納めることをタマシズメ（鎮魂）と呼び、新たに付着させることをタマフリ（魂振）と呼んで、健康を保ち、活力を維持するにはそのどちらも大切な仕業であると考えていました。／ですから、豊穡をもたらす側の賓客は、前の年の契約が履行された証である作物の一部を受納するとともに、一夜妻によるタマフリを受納することで契約が更新され、来年の豊穡を約束して帰っていくわけです。／この賓客が何者であるかについては、自分たちの先祖の魂が死後に寄り集う、永久の場所である常世の国から、子孫である自分たちへ幸福を約束するために訪

物から霊が失われたように  
芸から魂が失われて久しい

芸に魂を取り戻さねばならぬ  
魂の枯れ萎まぬよう  
振り鎮めるための芸を

世に芸が乏しいのならば  
みずからが芸の者になれ

芸の者になるためには  
天と地をむすび  
霊と体とを結ばねばならぬ

芸の者となって舞え  
芸の者となって詠え  
魂を振り鎮めるために



■鈴木和成訳『ランボー全集 個人新訳』（みすず書房 2011.9）

（ポール・ドムニー宛／シャルルヴィル、1871年5月15日）より「なぜって《私》ってのは他者なんですよ。もし銅が一ラッパにめざめたとしても、銅が悪いじゃありませんよ。これば僕には明らかことです。僕は思考の開花に立ち会っています。僕は思考を見つめ、耳を傾けます。弓を一振りします。《シンフォニー》が深みで揺れ動き、あるいは一跳びで舞台に躍り出ます。／バカな老いぼれたちが自我に関して誤った意味しか見出さなかったとしても、僕らとしては、そういう無数の骸骨どもを一掃してやるまでのことです。連中ときたら、はるか大昔から、自分らの半端な知性の産物をかき集めては、作者などと称してきたのです！」

「詩人たらんとする者の研鑽の第一歩は、みずからの、まったく認識です。彼は自分の魂を探し、それをよく調べ、試み、学びます。魂を知ったら、それを涵養しなくてはなりません。それは簡単なことのように。どんな頭脳にでも、自然の発展がなされます。多くの《エゴイスト》がみずから作者であると名乗りをあげます。知的に進歩すれば、それを自分のおかげだと思ふ連中も沢山います！——しかし問題は、景物的な魂をつくることなんです。畸形の子どもを人身売買したコンプラキコスさながら、というわけ！顔にイボを植えつけて栽培する男を想像してごらん下さい。／見者（ヴォワイヤン）にならなくてはならない、みずからを見者にしなくてはならない、と僕は言うのです。／《詩人》は、あらゆる感覚の、長きにわたる、大がかりな、理性にかなった錯乱によって、みずからを見者にします。あらゆる形式の魂と、苦痛と、狂気と。詩人は自分自身を探索します。自分のなかにあらゆる毒を汲みつくし、精髓だけを保つのです。筆舌に尽くしがたい責苦、そこに詩人はあらゆる信念、あらゆる超人的な力を必要とします。そこで詩人は誰にもまして大いなる病者、大いなる罪人、大いなる呪われた者に、——そして至高の《知者》になるのです！——なぜなら彼は未知に到達するからです。」

わたしはひと  
ひとは他者  
わたしも他者  
他者にとっての他者

わたしは何にでもなれる  
わたしは人称代名詞  
ときにわたしは鳥になる  
ときにわたしは風になる

わたしは作者とさえ自称できる  
書くことにしがみつながら  
けれど詩人になるためには  
みずからを見者にしなくてはならない

見者はみずからを探索する  
見者は未知へと向かわねばならない  
まだ見ぬ道を踏み分けねばならない  
ひとを超えてゆかねばならない



■坂口ふみ『ヘラクレイトスの仲間たち／人でつむぐ思想史Ⅰ』（ぶねうま舎 2012.9）

「近代は、古代中世の人びとがすでに気づいていたこと、つまり自己の存在の実感がどれだけ名証的であっても、自己の内に自己の存在の根拠は見当たらないという面に主として照明をあてたように思える。関係がむしろ実体を、個を成り立たせ、私の意識を超える諸々の働きが私を成立させているということを知るに導かれた。ヘラクレイトスが魂の「限界」の見出しがたさに気づき、プロティノスが一者からの流れを見、アウグスティヌスが創り主を見、トマスがペルソナは実体的な関係にほかならないと語り、総じて中世の人びとが個としての私の成立をいわば縦の、超越者との信と愛とのかかわりの内に見たのに対応して、近代以来の諸学は、内的にも外的にも個の存在・個の意識を成り立たせる諸々のいわば横の関連の網の目を探求し分析した。物理的・社会的・経済的・心理的・言語的――人は、そして「私」は、その無数の連関の中の、流動する一つの結節である。／少しとっぴに聞こえるかもしれないが、これは大きな方向としては、ヘラクレイトスとほぼ同時代に、ヒマラヤ山脈の南で、ゴータマ・ブッダが説きはじめた見方とも共通するものだった。」

「仏教はつねにあらゆる「網」を相対化し、網を脱することを教えてきた。しかし全体として見た時、脱する主体に名を与え、形を与え、言及することには奇妙に臆病だったように思える。またその強い脱却への志向のためか、新しい解釈枠、新しいゲーム、新しい網の制作には消極的だったように見える。基本的に抵抗と批判の思想だったのではあるまいか。／それに対し、西方では、自己の内に見ると思ったものに名を与え、自らがめざすべきだと思ったところに概念を与え、かりそめにもせよ実体のようにとらえることを努めてきた。神を立て、アイデアを立て、魂を立て、ペルソナを立てた。そこにはもとより、陥穽があり、賢明な人びとはその一面性と危うさを十分意識していた。しかしそれにもかかわらず、あえて実体化するという、名を与え、概念化し、とらえがたいものをかりそめにもせよとらえてみることに、そこにはその理想を、さらにはその理想を批判するためのバネをすらすらと再び批判し、位置移動する「自己」をも明瞭に意識させるという利点があったように思う。可視化ということは、固定化することでもあったが、それに思いをめぐらせ、その働きを強める役目も果たした。」

私は仮面なのだとしても  
仮面には仮面の役割があるだろう

幕はあがり  
役者は演じている

ただの遊戯にすぎぬとしても  
遊戯には遊戯としての役割があるのだ

それを楽しめぬというのなら  
無常と無我とを事とするがいい

けれど涅槃に入り寂靜したとしても  
それは莊嚴されねばならぬだろう

莊嚴のための遊戯ではないか  
遊戯のための仮面ではないか



# mediopos-230

2015.7.4



■養老孟司『虫の世』（廣済堂出版 2015.7）

「虫は拡大しないと、よく見えない。（・・・）／虫メガネであれ、顕微鏡であれ、拡大すると、なにが起こるか。むろん小さい虫が大きくなる。でも、そこで止まってはいけない。／小さい虫が大きくなったということは、じつは世界が大きくなったのである。その虫を百倍のレンズを通して見たとする。確かに虫は百倍になっているが、同時に大きくなったものがある。それは背景となっている世界全体である。虫を百倍にするということは、世界を百倍にしたということなのである。（・・・）／そこをたいていの人は忘れる。拡大して見た分だけ、世界が精密にわかった。ついそう思ってしまう。（・・・）拡大するというのは、そういう誤解を生じる。つまり部分を知ると、全体がわかったような気がするのである。そうは行きません。部分が精密にわかってきた分だけ、同じ精度で見た全体像はボケる。そういってもいい。（・・・）／世界を拡大すれば、自分のバカさ加減も拡大する。おおかたの科学者がそういわないのは、科学は客観的で、自分は関係ないと信じているからである。客観とは、見ている自分を度外視することだからである。でも、いくら度外視したつもりでも、見ているのは自分でしょ。」

「虫を見てなにがわかるか。（・・・）／すぐに気がつくのだが、なにかを「わかろう」として虫を見ているわけではない。じつは見ているうちに、なにかが「わかってしまう」のである。／現代社会では、人は意識的に行動するのだという常識が、無意識にできてしまっているように思う。だから、虫を見ることにしても、「なにかのために見ている」という暗黙の前提ができていいる。でも、実際はそうではなくて、ただ面白いから見ているので、そうしているうちに、なにかがわかってしまうのである。だからもちろん、なにもわからないことも年中ある。」

自分を測れない手は  
世界を測ることができるだろうか

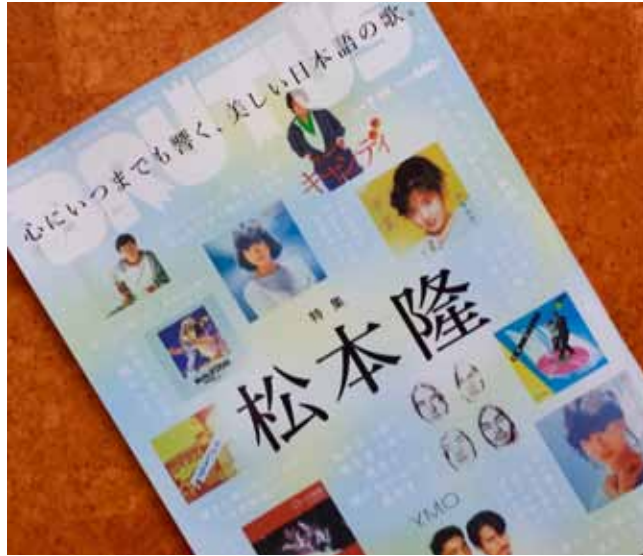
自分を見ない目は  
自分の物差しを持てるだろうか

わからないことは  
わからないというのがいい

わからないことがわかると  
ひとはその分だけわかることができる

自分を測る手で  
世界をその分だけ測ることができる

自分を見る目で  
世界をその分だけ見ることができる



■『BRUTUS804/特集 松本隆』（マガジンハウス 2015.7/15）

松任谷由実「松本さんと一緒に曲を作るときはほとんど私の曲先です。今回はメロウでマイナー調でとか、アップテンポでリズムカルにとか、そういった指示もあるんですが、基本的には「好きに曲を作っていいよ」と。詞については、言い尽くされていることかもしれないけど、松本さんのなかの少女性にもものすごく感心してしまいます。「赤いスイートピー」だと、「何故あなたが時計をチラッと見るたび泣きそうな気分になるの？」もう、気もが悪くなるくらい（笑）。松本さんと一緒に作った曲では、薬師丸ひろ子さんの「Woman」が最高傑作だと私は思っています。あの詞の意味は、左脳ではわからない。でも、曲と合わさったときに右脳に来るんです。なかでも、「眠り顔を 見てほしいの」というフレーズ。「寝顔」じゃなくて「眠り顔」。そこに死の匂いを感じます。「時の河を渡る船」も、冥界を漂う、あの世とこの世の渡し船のようだし。最近松本さんとお会いしたとき、「あの曲、意味はわからないけど、いいよね」って言ったら、「なぜわかんないの！」って憤慨してたけど。／ときにかく、松本さんと一緒にいると、私の方が男の子になってしまう。松本さんが女の子で。私は決してオヤジではないと自分では思っていますが、松本さんはなぜかいつも私のことを怖がってる。取って食ったりしないのに（笑）。そんな乙女すぎる松本さんに一つ文句を言うのなら、「ふりがなを振らなくても読める漢字で詞を書いてよ」かな。ふふふ、今回はこのへんでカンベンしてやろう（笑）。」

風をあつめて  
金色の花びら散らして  
伝えておくれ  
目をそらさずに

流れ出す虹の幻で  
空を染めてくれ  
涙も笑顔も続きは明日

街は驟雨  
通りは川  
夜明けの来ない夜はないさ

ああ時の河を渡る船に  
オールはない  
風をあつめて  
蒼空を翔けたいんです

\*上記はすべて  
松本隆のいろいろな歌詞からの編集



■中川純男・田子山和歌子・金子善彦 編『西洋思想における「個」の概念』（慶應義塾大学出版会 2011.3）  
（田子山和歌子：ライブニッツにとって個とは何であるか——モノドロジーを中心に）  
「以上のことから導かれるのは、ライブニッツにとって個であるとは身体と魂が共にあることだという興味深い個理解である。この理解は、ライブニッツにおいて終生一貫した理解であったことを確認したい。ライブニッツの哲学キャリア最初期の著述である 1663 年の学位論文『個の原理』で、ライブニッツは、トマス・アクィナスに準じて、個の原理を質量と形相の双方であるとし、質量と形相が結びついた「存在性全体（entitas tota）が個の原理だと結論した。このときの形相とは、魂の担っている役割に等しい。形相は、魂と同じく、質量を現実化する役割を持つとライブニッツは考えているからである。このように魂に等しい形相と、身体に等しい質量が共にあることが個としてあることだというのである。こうした『個の原理』における個理解は『モノドロジー』に重なる重要な部分であろう。真の意味での個は魂しかないわけであるが、しかし、真の意味での個は質量や物体と共にあってこそ意味を持つというのが『モノドロジー』の個理解なのである。」

なぜキリスト事件があったのか  
ロゴスが地上を生きる必要があったからだ

ロゴスは身体の内かに生きて  
はじめて個の種を生む

からだという殻に  
ロゴスが宿る

人はロゴスを生きるために  
個というモノドとならねばならない

そしてモノドはインドラの網のように縁起し  
魂は荘厳されねばならないだろう

その荘厳のためにこそ魂は  
身体を生きなければならないのだ





最初に沈黙があった  
やがて言葉が生まれ  
言葉は言葉を生んで  
さらに言葉を生んだ  
言葉のための言葉へ  
沈黙さえも言葉へと

語りえぬものの言葉  
言葉より前ではなく  
言葉の後に来るもの  
最後に沈黙があった  
語りえぬものゆえに  
迦葉の笑みのように

■中村直行『沈黙と無言の哲学／＜語りえぬもの＞の語りえなさを語る』（大学教育出版 2015.4）

「言葉では語ることでできないものがある。それは何なのかはどうしても言えない。非常に饒舌な表現手段である言葉にも、表現し損ねる天敵＜語りえぬもの＞の語りえなさをが存在する。それには沈黙を守らねばならない。しかしその＜語りえぬもの＞が、どうして語るができないのかという理由だけなら、何とかいえるだろう。」

「しかし語りえぬものは、やはり語りえず。「ノー・コメント」と言うことと「ノー・コメント」とさえ言わないことには、大きな違いがある。後者は全くの無言である。無言であることと無言について語ることに大きな違いがある。いったん解説をし出したら、もはやその発話行為は無言を代弁することにより、原本の無言を台無しにしてしまう。無言は無言だ（しゃべらないという点において、同語反復として）。しかし無言は無言ではない（しゃべるのでは当然ないが、さりとして、しゃべら「ない」という積極的な否定などは全くしてい「ない」という点において、無言ではない）。



見るために  
眼はみずからを見ない

光は見えない  
光は照らす

鏡は見えない  
鏡は映す

私は見えない  
私はみずからに  
みずからを映す

神は隠れている  
神はみずからに  
みずからを映す

■井上克人『<時>と<鏡>超絶的覆蔵性の哲学／道元・西田・大拙・ハイデガーの思索をめくって』

（関西大学出版部 2015.3）

「鏡は物を映すと同時に、鏡自身は映像をそれ自身の内に顕現させながらも、自ら映像になることはなく、映像を映し出すということ、自己返照ということであって、そういう仕方では鏡がどこまでも明鏡でありえてこそ、その明鏡の中で映像が映像として成り立つのである。西田自身、場所の論理を述べるに当たり、それを「自己自身を照らす鏡」に喩えているのは偶然ではない。／宗教哲学においては、<超越>の次元を抜きにしては語れないが、超越が超越である限り、それはどこまでも覆蔵的傾向があるのであり、しかもそれは我々に対して超越的で覆蔵的であると同時に、我々に対する以前の次元でも、それはそれ自体に於いて自己覆蔵的なのである。神はどこまでも「隠れたる神」なのであり、「輝ける闇」なのである。」



■中条省平編『COM傑作選（上・下）』（ちくま文庫 2015.34）

（COM NO.1「創刊のことば」手塚治虫／昭和41年12月1日）より

「まんがを愛する仲間たちに、まんが家のほんとうの心を伝える新しいコミックマガジン——そんなことを考えて、わたしたちはこの雑誌のタイトルを「COM」ときめた。／今はまんが全盛時代だといわれている。だが、はたして質的にどれだけすぐれた作品が発表されているのだろうか。まんが家の多くは、過酷な商業主義の要求の前に屈服し、追従し、妥協しながら仕事に忙殺されているのが実状ではないだろうか。／わたしは、この雑誌において、ほんとうのストーリーまんがとはどういうものかを、わたしなりに示したいと思う。同時に、かつての「漫画少年」のように、新人登竜門としてこの雑誌を役立たせたいと考えている。「COM」は、まんがを愛する仲間たちの雑誌である。／月刊雑誌「COM」を、そうした意味で、読者のみなさんがかわいがってくださるようお願いしたい。」

ああ  
COMよ！

手塚治虫  
岡田史子  
永島慎二  
青柳祐介  
真崎守  
あすなひろし  
草森紳一  
石子順造  
八代まさこ  
長谷川法世  
小野耕世  
野田昌宏  
樋口太郎  
長谷邦夫  
坂口尚  
やまだ紫  
楠勝平  
赤塚不二夫  
石ノ森章太郎  
樹村みのり  
大山学  
松本零士  
諸星大二郎  
斉藤次郎  
上村一夫  
日野日出志  
萩尾望都

永遠なれ！



■朝永振一郎著作集Ⅰ『鳥獣戯画』（みすず書房 1981.11）

（朝永：朝永振一郎／北：北杜夫「朝永 僕はねえ、虫で飼ったことがあるのはテントウ虫ですよ。／北 テントウ虫を。／朝永 あのアブラ虫を食うやつを、卵から飼った。あの黄色い卵がくっついてますね。あれを取ってきて、コップの中へアブラ虫のついた枝を入れて、卵を入れておくと、かえって、それを食ってサナギになって、最後にテントウ虫になる。それは飼ったことがあります。／北 じゃあ、先生はかなりの自然愛好者でいらっしゃるね。／朝永 まあそうですね。僕はねえ、北さんがいつか、あれ、週刊朝日だったかなあ。遠藤周作氏をこてんこてんにやつけた。／北 月が落ちちるとかいうやつですか。あれは酔っぱらって話した、僕自身、よくわからないんです。／朝永 偶然、あれ読んだんですけど、あれを拝見して大変おもしろく思ったのは、非自然科学者がどういう考え方をしているかっていうのは、これは遠藤さんには大変失礼だけれど。／北 大体、あの文士ってのは科学オンチですね。はっきりいまして。／朝永 科学者はまた、文学オンチだった。／北 でも、それ極端でして、もう本当にすごい人が多いんじゃないですか。それで、科学に対して、非常に憧憬の目と、それから科学なんてものはってのと、両方の考え方を持っていたりすることがありますね。」

好きなもの  
嫌いなもの

得意なもの  
苦手なもの

こちらの岸  
あちらの岸

わたしの岸  
あなたの岸

橋を架けるために  
なにができるだろう

我知らず架けられた梁は  
どうしたら外せるのだろう



不易の  
流れている  
宇宙の河で  
私は  
永遠の季語を  
捕まえようとしている  
釣り人のようだ

■長谷川権『俳句の宇宙』（中公文庫 2013.7）

「造化」から「自然」への大変動といっても、忘れてはならないのは、不易の部分は何も変わっていない、一貫しているということだ。「造化」も「自然」も宇宙というものの時代によらえ方の違いにすぎない。古いものを捨て新しいものを手にしたというのではなく、いままで持っていたものを握り直しただけのことだ。／そして、いま次の新しい大変動に立ち会っているのかもしれない。／「自然」から「宇宙」へ。／「宇宙」と言い換えることで新しく見えてくるものは何だろうか。／いちばん大きな違いは、「自然」は人間の外側をとりまいているものだったが、「宇宙」は人間の外側にあると同時に内側にも見出せるだろうということだ。自分を包む宇宙に目を徴らし耳を傾ける君は自分の内部にも同じ宇宙が広がっているのに気づくだろう。やわらかく波打ち収縮する肺や筋肉、太陽としての心臓、銀河のようにほの白く光意識。ここでは主体と客体、内部と外部の違いははたして重要なことではない。自分の外側に見ることのできるものは、自分の内側に感じとることができるものだ。／（・・・）「自然」から「宇宙」への変動によって、滅んでいく季語と生まれてくる季語があるだろう。宇宙とのかかわりを見失った季語は消え、新しく宇宙とのつながりを見出した季語が現われる。」





イエスが家族へともたらした剣のように  
閉じた平和は開かれねばならぬだろう

血と地で作られた船は  
大海に出でて荒波に置かれねばならぬだろう

海は地は天は動いてやまず  
みずから足下を揺るがせ続けるだろう

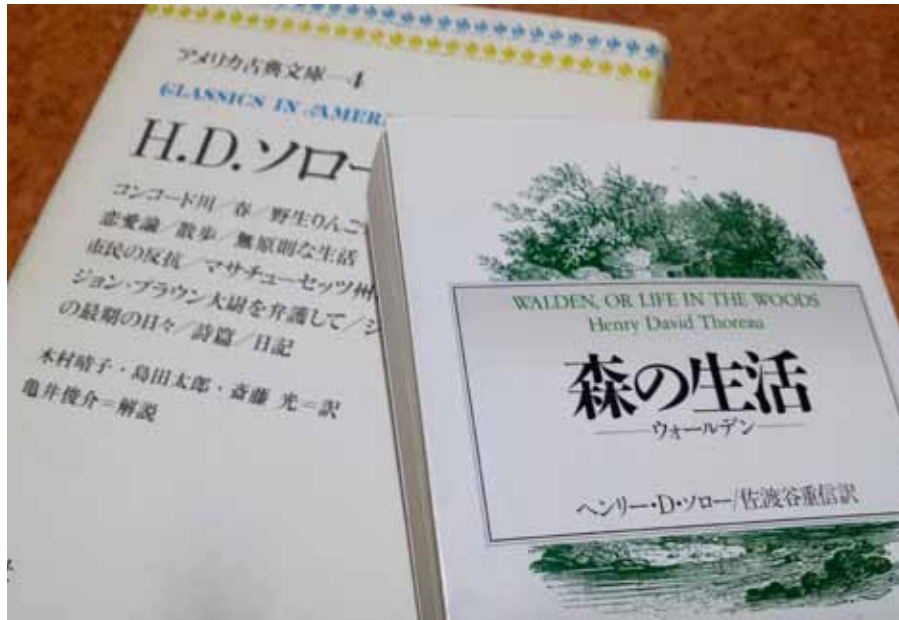
正義は正義と戦い  
やがてみずからへの戦いを続けるだろう

やがて閉じた天と地は開かれ  
そしてむすばれてゆくだろう

■河野哲也『境界の現象学／始原の海から流体の存在論へ』（筑摩選書 2014.7）

「道徳性は世界の誰に対しても、どの境域の人びとに対しても向けられ、いかなる人も道徳的配慮のもとに置かれるべきだという普遍化された考え方は、同心円主義からはけっして生まれてこない。哲学者のアンドレ・ベルクソンは、同心円主義の問題をずいぶんと前に見抜いていた。彼は、『道徳と宗教の二源泉』のなかで、道徳のあるべき姿として「開かれた道徳」という考え方を提起している。／ベルクソンは、流体の哲学者である。彼によれば、生命は本質的に動的で、創造的な運動をする存在である。この動的性質を押しとどめようとするあらゆる抑圧は生命に反している。道徳性が生命を育み、成長を促すためのものであるならば、道徳とは、開かれ、動的でなければならない。したがって、道徳的な社会とは、そうした実践ができるようにつねに自らを更新できるダイナミズムをもっていなければならない。閉じて、固定的なものは、その性質そのものによって、生命ある存在を傷つける。なぜなら、創造的な運動を否定することは、生命を否定することに等しいからである。／ベルクソンによれば、閉じたものと開いたものは根本的に区別されるべきである。家族愛や郷土愛、祖国愛といった道徳心は、自己愛あるいは自己保存欲求の延長にすぎない。それは閉じた道徳である。閉じた道徳は、一般的なルールを成員に遵守するように求め、社会のための責務を課す。私たちの社会的責務の根底にある社会的本能は、どんなに広大であるにせよ利己心の延長であり、本質的に閉じた社会を目指している。そして、この本能は人類全体を包括しようとするのではない。むしろ、同質性を求めて人びとを排除していく。」

「閉じた道徳は、個人と社会を動かないものとして固定したがる。そこでの道徳の目的は安定した秩序を構築することにある。実際に、近代の道徳理論や倫理学にも、同じ閉じた傾向が認められる。すなわち、安定した不動のものへ執着し、不変の原則や規則性へ執着する。不変性や普遍性、法則性に高い価値がおかれて理論が構築され、あたかも自然科学における法則適用のようにして道徳的問題が処理できると考えられている。近代の倫理学は、カント主義であろうと功利主義であろうと、道徳のモデルを法律に求め、普遍的に妥当する規範を形成しようと努めてきた。それらは、国家の法的基盤を与えることを目的としていたからである。」



■ヘンリー・D・ソロー『森の生活／ウォールデン』（講談社学術文庫 1991.3）

■『アメリカ古典文庫4 H・D・ソロー』（研究社 1977.2）

「どの道を行くかということは、けっしてどうでもよいことではない。正しい道というものがあるのだ。ところが、われわれは不注意と愚かしさから、正しくない道を選んでしまうことが多い。この現実の世界でいまだかつて誰も歩いたことのない道、心の内なる理想の世界でわれわれが好んで旅する道とそっくり呼応するような道を、われわれは歩きたいと思う。だが、ときとして、自分の方向を選ぶのが難しいことも確かにある。われわれの考えのなかで、まだそれが明確になっていないからである。」（「散歩」より）

正しい道が正しい道であるためには  
道を行く脚が確かであればならない

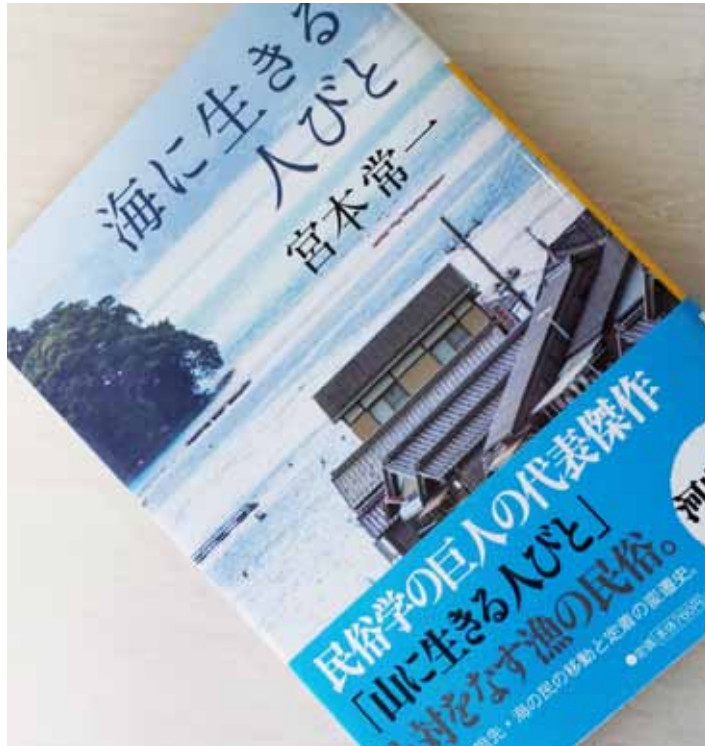
前を見る目は四方を見ていなければならない  
しかも天と地を見定めながら

目は光を宿していなければならない  
色を感受する魂のパレットも持たねばならない

だから正しい道はときに  
正しさを踏み誤ってしまうことになる

道を探している私が  
番地を間違えたことに気づいたときには

自分の歪んだ鏡のことを思い  
その歪んだ地図を歩んだ道をたどり直してみることだ



歴史は書かれる

けれどそこに生きた人はいない

歴史は学ばれる

けれどそこに生きた人はいない

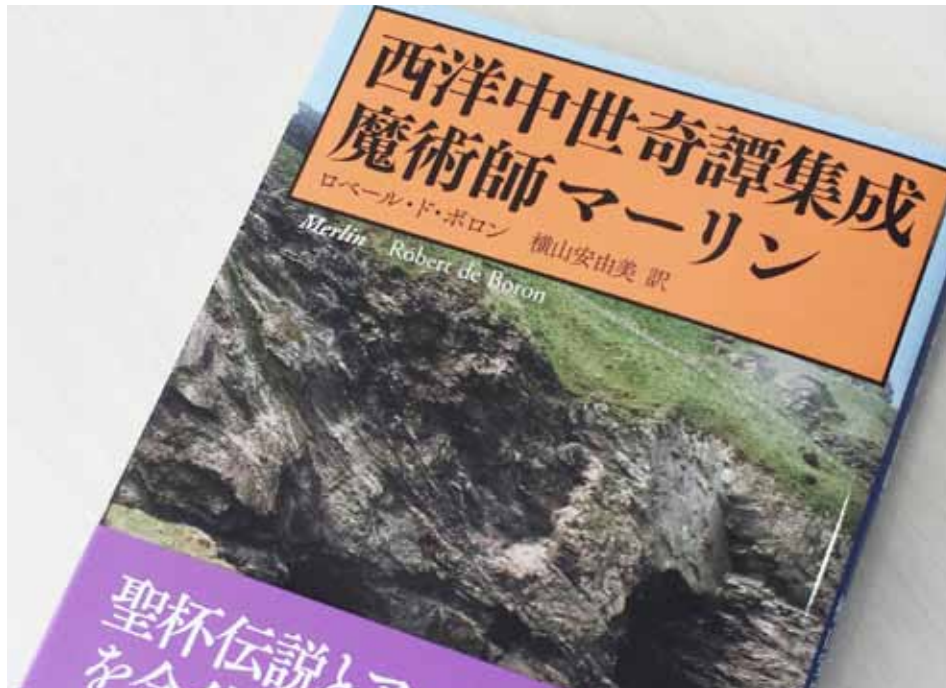
人は政治になり主義になりメディアになり

そうして生きた姿や言葉は失われてゆく

■宮本常一『海に生きる人びと』（河出文庫 2015.7）

「日本は島国であり、多くの属島をもっている。人の住む島だけでも五〇〇に近い。それにもかかわらず、民族全体に海洋性らしいものはみとめられない。わずかに海洋民族らしい活躍をしたのは少数の海人とその子孫たちにすぎぬ。そして日本人は全体としておよそ海に無関心であり海をおそれさえした。その事実は島渡りの船に乗って見るとよくわかる。船に乗ると何はさておいても船室にはいつても横になることばかり考える。甲板で海の風景をたのしもうとするようなものはごく少数である。それだけに国民全体としても海に対しては無関心に近い。今日まで漁民の歴史のほとんど考えられてもみなかったのはそのためであろう。」

「造船の歴史や海運の歴史、漁業の歴史について書いたものはある。だが船をつくり、船を乗りまわし、魚をとった人たちの歴史は案外見落とされているのである。私は「日本民衆史」を書くことによって、何とかして産業や文化の歴史のかけにかくれがちになる、そのにない手であった人間の歴史を明らかにしたいと思っている。」



問いは  
発せられねばならない

問いなき聖杯は  
苦しみを受け続けるだろう

問いは  
問い続けられねばならない

新たな問いなきとき  
聖杯は姿を消してしまうだろう

真に新たな問いが問われるとき  
聖杯はわが胸に現れるだろう

天空の彼方と大地の深淵を  
魂のなかでむすぶために

■ロベール・ド・ボロン『西洋中世奇譚集成 魔術師マーリン』（講談社学術文庫 2015.7）

「さて、聖杯はヨセフに与えられ、彼の死後はブロンという名の義弟に委ねられたことをお知りください。このブロンには十二人の息子がいたのですが、そのうちのアラン・リ・グロという名の息子に漁夫王〔ブロン〕は兄弟たちの教導を命じました。我らが主の命じるまま、このアランはユダヤの国に行き、西方の島々に向かい、ついにこの国に到着したのです。漁夫王は世界中で最も美しい土地のひとつ、アイルランドの島々に住み着きました。ですが彼はおよそ人間が味わったなかで最大の辛苦、大いなる病を負っていたのだとお知りください。とある騎士が円卓に座するまでは、老いによってしても病によってしても死ぬことはできません。その騎士は騎馬試合や冒険において実に多くの武功を収めて、この世で一番の名声を獲得するでしょう。栄華の暁に豊かな漁夫王の宮廷に辿りつき、聖杯は何のために供されたのか、また供されているのかを尋ねることになりましょう。その瞬間王は癒えますが、騎士に我らが主の秘密の言葉を伝えて息を引き取ります。この騎士はイエス・キリストの御血の守護者となるでしょう。そうしてついにブリタニアの地の魔法は解け、予言が実現されるのです。」





■『湯川秀樹対談集 人間の発見』（講談社 昭和51年1月）  
（休みの思想／作田啓一・多田道太郎との対談）より

「湯川 先ほどアリストテレスにちょっとふれましたけれども、彼はエピクロスより一つ前の時代の人で、働いて生産的な仕事をするということと、もう一つ、ひまというものがあって、その「ひま」が大事であると言っている。仕事をするということは、ひまをこしらえるためである。生産性を上げるということはひまをつくるためである。ひまがあるがゆえに、学問とか芸術とか、あるいは徳をみがくとか、より高度の人間活動ができるのであるという考えですね。学校、スクールというのはスコラですか。あれも、もともとはひまという意味ですね。このごろは大学も少し忙しすぎますけれども、それはおかしいので、むしろひまがあるから学問ができるわけですね。休みの思想というのは、ただ休むことはではない。もちろんボーッとしていてもかまいませんよ。からだを休めてもいいです。頭を休めてもいいです。しかし、休めばこそ、いろいろな考えが湧きだしてくる。／結論は何も出す必要がないと思いますが、先ほど三人で雑談しておりましたら、どうも今日の話の落ち着くところは、イマジネーション・空想・想像であろうということになりましたね。私たちはひまがあればあれこれ考える。あること、あらぬことを考える。それは非常に楽しいことであり、それが学問、芸術につながることもある。しかし、別にそれにつながらなくてもいい。あるいはそれが自分を見つめ、自分をみがくということにつながってもよし、そうでなくてもよしです。それもくたびれたらごろ寝をしてもいいでしょう。こういうふうな人間の活動らしからぬ活動、見た目は休んでいるけれども心が働いている。そういう活動が大事だ。そういう価値観の変化が必要な時代だと思うわけです。」

ひまはもてあまさないで  
あらぬことでも考えよう

あることばかり考えると  
あらぬことがわからなくなる

見えないものが見えなくなる  
聞こえないものが聞こえなくなる

ばかも休み休みしかできないとしても  
ばかになれるひまもなくてはならない

ばかになれないとかこしすぎて  
あたまのなかがいっぱいになってしまう

あたまのなかはからっぽがいい  
ときおりそのなかを鳥がとぶような

ひまなときにはからっぽになるといい  
あらぬことがなければひとはひとでなしに  
なってしまうから





■松本健一『雲に立つ／頭山満の「場所」』（文藝春秋 1996.10）

■夢野久作『近世快人伝／頭山満から父杉山茂丸まで』（文春文藝ライブラリー 2015.6）

「頭山満は、孫の統一が書いたものによれば、玄洋社の若ものたちによく、「一人でいて淋しくない人間になれ」といった。（・・・）／頭山満の「一人でいて淋しくない人間」という言葉の意味は、杉山茂丸（そうして夢野久作）流に  
いってみれば、魔人、となるだろう。魔人は、心中で何ものかに憑かれているのだから、孤りでも淋しくない  
のである。かれが関心をもっているのは、隣にだれがいるとか、じぶんの後を継ぐものはいるか、などという  
ことではない。かれの関心の対象は、心中でかれを呼ぶ声だけである。」

「たった一人でいて淋しくない人間というのは、外からみると、畸人である。もっというなら、みずからの内部に「火種」をかかえた魔人である。／そしてそのような原像としての頭山満が浮上してくると、かれが草むらに一人くつきりと立つこと（草莽崛起）を目ざしつづけた吉田松陰の道すじに連なっていることが、いよいよ明らかになったのである。松陰の言葉に、次のようなものがあつた。「恐れながら、天朝も幕府・吾藩も入らぬ、只だ六尺の微軀が入用」と。／しかし、たった一人でいて淋しくない人間というのは、松陰のいう、ただ六尺の微軀が入用、と思ひ切つたひとのことである。そんな「場所」に頭山満は立っていた。」

一人でいる淋しさゆえに  
群れを求めるならば  
自由は失われてしまうだろう

大樹をもとめるにせよ  
それに反するにせよ  
群れを求めるならば

ひとは一人のとき  
愛することができる  
ひとは一人のとき  
真に問うことができる

呼ばれるならば  
天を呼ばれることだ  
真に我を呼ぶ声に  
一人で応えることだ



■是枝裕和『是枝裕和对談集 世界といまを考える1』（PHP 文庫 2015.6）  
（山田太一／ささやかな日常を、丁寧に描くこと）

「是枝 父権的なものというのでしょうか、未熟なものを導くものとしての父、たとえば黒澤明の映画によく出てくる師弟という関係は、山田さんの脚本にもときどき出てきますよね。『男たちの旅路』で鶴田浩二が演じた特攻隊の生き残りや、『早春スケッチブック』で山崎努が演じた元カメラマンなど、平穏な日常に甘んじ、目的を見失っている青年に対して、ある種の父権的な存在として登場し、彼らの存在意義を揺さぶる。しかし、必ずしも父権的なものを肯定して、だらしのない父親が否定されるわけではない。山田さんのスタンスは、たとえ大河ドラマでも支配者層は描かない。／山田 そうですね、支配者層には興味がないんですね（笑）。／是枝 僕は父権的なものに対する非常な嫌悪感というか、父の抑圧がないなかで生きてきた人間が、大人になってからそういうものに憧れたり、幻想を持ってしまったりする状況が非常に危険だと感じています。そういう外部から訪れる父権的なものに寄りかからずに、どういうふうに父性というものが確立できるかを考えていけば、新しい父親像というものが僕らの世代以降に生まれるのではないかなと思うのですが……。」

父はどこからくるのだろう  
母はどこからくるのだろう

父は父ではなく父になり  
母は母ではなく母になる

父も母もないところで  
自由に生きてゆけないものか

権力者はどこからくるのだろう  
反対者はどこからくるのだろう

権力者は権力者ではなく権力者になり  
反対者は反対者ではなく反対者になる

権力者も反対者もないところで  
自由に生きてゆけないものか



■安倍夜郎・佐古文男『四万十食堂』（双葉社 2014.7）

（安倍夜郎）「ボクの出身は高知県中村市。それが平成の大合併とやらで、勝手に四万十市に変えられてしまった。なんだかなあである。／四万十川というのは、元々一級河川＜渡川＞の別称だ。それがマスコミで有名になり、市の名前まで変えてしまった。おまけに近隣に四万十町という町まで出来て、現在、高知県には四万十市と四万十町が存在するという、なんとも紛らわしくてバカバカしいことになっている。／四万十は四万十川だけにしておけばいいのにね。それがボクの正直な思いだ。人が余計な手を加えようと口なことではない。地元では今も中村は中村で、窪川は窪川である。／共著の佐古さんも中村の人だ。後でわかったことだが、中村小学校、中村中学校でボクの二級上の先輩だった。共通の知り合いも何人かいた。狭い町である。飲み屋で会った初対面の人が、知り合いの知り合いだったり、遠い親戚だったりするのは日常茶飯事だ。／佐古さんは中学時代、相当あれいてケンカに明け暮れていたようだ。ひとり大人しくマンガを描いていたボクとはなんの接点もなかった。それが巡り巡って不思議なご縁で、一緒に故郷の本を出すことになった。／佐古さんと中村の話をするとききることがない。「あお駄菓子やによく行った」「あそこにて焼きはうまかった」「春はイタドリ、秋は山芋を掘りに行った」／鼻水たらしながら遊び回った昔の町並みが次々と浮かんでくる。／『四万十食堂』は、自称＜故郷に捨てられた男＞佐古さんの、故郷への熱い思いがいっぱいつまった本です。ボクはほんの少しだけお手伝いさせてもらいました。／お国自慢というのはしらけるものです。どの土地でも、そこでしか食べられない珍しいもの、美味しいものはそれなりにあるでしょう。でも、それをことさら喧伝することをボクは好みません。佐古さんも同じ思いでした。故郷を愛すればこそ大げさなことが書きたくないのです。／「ちょっとコレ食べてみて。ね、おいしいでしょ!？」そんなものを集めたのが、この『四万十食堂』です。」

故郷を愛する者は  
恥じらいながら小さな声で  
つぶやくくらいがいい

故郷を愛する者は  
故郷喪失者となるのがいい  
分かるためには  
分かたれなければならないから

愛することはややこしい  
自分が代表するかのように故郷を語ったり  
その裏返しになってしまったりするからだ

真に愛する者は群れはしない  
自分を代表者などにはしない  
ましてだれかに教えたりなどしないから

故郷を愛する者は  
静かに誇りをもって歌うのがいい  
だれにも聞こえないほどの小さな声で  
自分の深い大切な場所を確かめながら



■山田奨治『東京ブギウギと鈴木大拙』（人文書院 2015.4）

「大拙はまた、こんなたとえもしている。猫が子を運ぶとき、親猫は子猫の首を口にくわえて、一匹一匹連れて行く。子猫は親猫に任せきりでいい。ところが猿だとそうはいかない。小猿は親の背に乗せられて運ばれるので、親の体を手足や尻尾で自らつかまえなければならない。子猫の移動は浄土真宗の他力で、小猿の移動は禅宗の自力なのだ。／この「猫の救済」と「猿の救済」は、真宗の「大悲」と禅宗の「大智」を象徴している。大拙は禅者だったのではなく、禅にも真にも関心のあった仏教学者だったことを思いだろそう。「不肖の息子」に厳しくあたったのは、大拙の禅宗的な「猿の救済」の部分で、アランを見捨てなかったのは、真宗的な「猫の救済」の部分なのだ。禅と真、「大智」と「大悲」、「猿の救済」と「猫の救済」、その両方を大拙は持っていた。その点を見過ごしてしまうと、大拙の子への思いがあいまいにみえ、一見矛盾した態度をとっていただけに思えてしまう。／晩年の大拙は、仏道を説くのに親猫と子猫のたとえ話をよくしていた。1963年夏に軽井沢の出光寮で講演したときに、後に出光興産の社長・相談役になる石田正實は、大拙が親猫と子猫の話をしながら机に伏してなく姿を目撃している。子を思う親猫の心は、よほど大拙の琴線に触れるものだった。／大拙の真宗観では、他力は安穩としていても得られるものではなく、「どれほど愚かであろうとも、いかに無能無力であろうとも、彼の岸の到るための努力のすべてを尽くしてしまわねば」与えられることのないものだった。酒癖の悪さを自覚していたはずのアランが、飲酒を止めなかったことで身を滅ぼしても、それでも「猫の救済」の手を差し伸べることは、大拙はしなかった。いや、あるいは臨終の床で「おう、おう」とアランににじり寄ったことが、大拙が息子にみせた最後の「大悲」だったのかもしれない。／大拙の「大悲」はアランに確実に届いたはずだ。自分に投げられた最期のことばというものは、残された者が先立つ者に対して抱く感情を、決定的なものにする。それでも父は許してくれたという、忘れがたい印象を息子に残して、親子は永遠の別れをした。」

みずからの  
底知れぬ愚かさに  
気づけないとき  
知は訪れないだろう

みずからの  
あまりの救われなさに  
涙しないとき  
愛は訪れないだろう

みずからの  
正しさを疑わぬ熱に  
浮かされるとき  
目は開かれないだろう

みずからの  
なすすべもない苦しみに  
歩むことを止めたとき  
救いは訪れないだろう

けれども  
みずからの  
知らぬところで  
おうおうと  
呼びかけつづけている  
大悲と大智の  
かぎりなく広い  
てのひらがある



# mediopos-247

2015.7.21



## ■堀内守『コメニウスとその時代』（玉川大学出版部 1984.7）

「コメニウスの視野は、疑いと、不安と、困惑と、恐怖とを通り抜けた。このことの方が重要であるように思える。私たちの時代は、明るい視野よりも、その視野の端にはみ出している暗い部分に釘づけにされてきている。高貴なる目標はもはや地上に引きずり下ろされてしまった。そんな目標よりも、困惑と、恐怖と、不安と、疑いを表現する方が写実的だと見なされている。のみならず、これらの方が本物に見えるのである。／もし私たちが祭儀をよく理解できていたら、コメニウスの視野が退屈きわまりない感傷やもったいぶった自己満足とはちがい、ひとつの大いなる祝祭に通じていると知ることができるであろう。忘れてはならないのは祝祭には二つの極があるということである。一方の極には歓声をあげ、足を踏みならし、手をうち合わせて祝福する参加がある。他方の極には沈黙のクライマックスがある。よく考えると、沈黙もまたひとつの経験を分かち合ったことを、深い思いをこめて確認するしかたなのである。沈黙というものを私たちはほとんど忘れてしまった。」

「コメニウスは鋭敏に嗅ぎ分けた。それは「バラバラなもの」の方がコメニウスの警戒を引き寄せるからである。彼はさまざまところに「バラバラ」を感じとった。／「バラバラ」つまり「混乱と無秩序」である。バラバラなものは不気味である。(…)／バラバラなものの中に、ちょっとした形を見つける。そして楽しむ。それも人間の根源的な生命力のなすところである。ならば、その関連づけをあえて試みてみようではないか。コメニウスの教授関係の作品はみなこのような方針で書かれていった。汎知学関係の作品もそれと平行して書き続けられていった。」

沈黙も祝祭である  
忘れられた沈黙のなかで  
切り離されてしまった  
数限りない知の欠片が集まり  
さまざまな形を描き始める

沈黙は天空へ  
そして大地の深みへ  
喧噪のなかで  
聞こえなくなった  
歌を聴くために

知の欠片の音が鳴り  
また別の知の音が鳴り  
やがて交響してゆく  
智のタペストリーを  
沈黙の祝祭が描きはじめる





■ギルバート・ホワイト『セルボーンの博物誌』（講談社学術文庫 1992.3）

（1770年2月19日／養い親を見分けるカッコウの才能）「謹啓、「カッコウは、何でもかでも、目の前にあらわれた最初の鳥に卵を生みつけるのではなく、雛を委ねる乳母役には、あるていど同族の鳥を選ぶものらしい」との貴下の御観察は、私にはまったく初耳です。そしてたいへん興味深く感じましたので、いきおいそれからそれへと思いに耽り、果して事実そうであるのか、そして、それにはどんな理由があるのかを、ひたすら考えました。ふり返って考えてみれば、この辺でカッコウの姿を見かけた場合は例外なく、セキレイ、カヤクグリ、マキバタヒバリ、ノドジロムシクイ、ロビンといった、すべて嘴の軟かな、虫類を食べる鳥の巣にかざられているのでした。碩学ウィラピイ氏（英国の博物学者）は、ドン栗や穀類や、そうした堅い植物を常食にしている鳥、モリバトとズオイアトリの巣を挙げております。しかし、氏自身の知識として挙げているわけではなく、氏は、セキレイがカッコウを育てているのを、自身で見たと言っております。／嘴の軟かな鳥が、嘴の硬い鳥と「同じ食物を食べて生活することは、恐らく不可能としか考えられません。（・・・）カッコウは（・・・）自分で育てもしない自分の卵や雛の養い親として、どの種の鳥が適当であり、また同族であるかを見分け得る、更に一段とすぐれた才能を賦与されていて、卵や雛をその種の鳥だけに面倒を見てもらうようなことまでが、万一あるとすれば、これは不思議の上に更に不思議を積み重ねることになり、神の方式は何等一定の形式又は法則に従うものではなくて、新しい見方を与えたり、あの手この手の趣向を見えて、私どもを驚かせるということをして、生々しく例示していることになるでしょう。」

ホトトギスがウグイスに託卵するのも不思議だが育てられたホトトギスが夏が終わるといっせいに帰っていくのも不思議だホトトギスは親を知らず親を知らぬホトトギスは示し合わせて帰っていきまたやってきて託卵する

人間も似たようなものか見知らぬ場所で生まれてそれなりに育てられてはやがては死んで帰りゆくすべては天と地の采配でたくましく生きて死んでそのくり返しを遊戯するいずれがウグイスなのかホトトギスなのか知らず人は不思議を生きてゆく

# mediopos-249

2015.7.23



■田中優子『カムイ伝講義／カムイ伝のむこうに広がる江戸時代から「いま」を読む』(小学館 2008.10)

「武士は必要なのか？ と問うた人間はいただろうか。熊沢蕃山を見ていると、いたような気がしてくる。そう自分に問いつつながら武士を務めた人間もいれば、自ら武士をやめる人間もいた。そして仕官したくともできない浪人たちも、いたのである。」

「[武士道]は明治以降、日本人にも世界にも知られるようになった。武士道が日本人の倫理観を高めていた、という新渡戸稲造の主張は、外国人向けの日本人のイメージ刷新に役立つことはあっても、実態は違う。『カムイ伝』も武士道を礼賛などしていない。江戸時代の日本人の精神性を支えていたものは、武士階級に関するものの中では、学問であろう。武道はその補填をすることはあっても主要なものではない。なぜなら、江戸時代は武力を持つ武士を学問で乗り越え、政策に役立てようとしたわけだから、江戸時代の武士にとって主要なのは学問(四書五経)である。しかし思うように学問をすることのできない武士たちが多かったもの『カムイ伝』で見ると通りで、それは武士の階級格差と貧しさによる。そこから考えて、武士だけが金銭に関わらなかった、という新渡戸の観点は皮肉である。関わらなかったのではなく、関われなかったからだ。江戸時代の武士について理解するには、やはり浪人と下級武士を見なくてはならないだろう。「武士は何のためにいたのか」という問いは、現代だからこそ江戸時代をふり返ってということができるのであろう。いまの社会で有用だと思われる人々や職種の中にも、本当は要らないものがあるはずだ。いまの社会で無用だと思われる事柄の中に、真に社会や世界の救いになるものがあるであろう。それはわかり難いことではあるが、見つめようとする価値はある。」

それが何の役にたつのか  
ほんとうのところは  
わからないことだらけだろう

価値は物差しで変わり  
有用のなかの無用や  
無用のなかの有用が  
問い直されることもあるだろう

目をつむったままで  
象をなでるように  
いままでしているものが何なのか  
わかったものではない

役に立つことばかりをして  
忙しくすることよりも  
馬鹿な顔をして笑っていたほうが  
ずっといいこともあるのかもしれない

馬鹿でいるのは勇気がいる  
人に認められないのは勇気がいる  
そんな勇気がないからこそ  
賢そうな顔をしているのかもしれない

役にたつところへ人は集まり  
得をるところへ人は集まる  
けれどその賢い群れは  
レミングの大移動となるのかもしれないのだ



■加藤秀俊『メディアの展開／情報社会学からみた「近代」』（中央公論新社 2015.5）

「日本では十八世紀以降、着々と変化が発生し、それは「近代化」の道を実に確実にあゆみはじめていたことをしめしていた。だから外国の学会で「徳川時代」のことを「初期近代」ということばでとらえることがふつうになっている。（…）／それにもかかわらず、なぜ日本の歴史学者たちがそれをスナオに受け入れて「初期近代」といわないのか、それは明治にはじまる日本の「国史学」が維新以前に「近代」をみとめないことを業界の暗黙の前提にしてきたからなのではあるまいか、とわたしはおもうようになってきた。／具体的にいうと、外国の学者たちが「初期近代」とよんでいる時期を日本の歴史学者たちは「近世」と名づけてきているのである。いまでもそうだ。まことにふしぎである。じっさい、中学・高校から大学にいたるまで「世界史」では「古代・中世・近代」という三分法なのに「日本史」では「古代・中世・近世・近代」という四つの時代区分になっている。」

「日本の歴史に特有」とする「近世」という奇妙な発明も、まさしく「過去との連続感」を否定するためのものにほかならなかった。「近世」というのは、歴史に「特有」だったのではなく、歴史をみる目、つまり「史観」が「特有」だったのだ。」

時代をどこで分けるか  
歴史を見る目がそれを決める

時代を連続させるか分断させるか  
そのフィルターが歴史をつくる

歴史を学ぶと称するときは  
そのことに無意識であることはできない

近代と近世という区分も  
戦前と戦後という区分も  
それを決めている目がある

グローバルメディアの前と後や  
インターネットの前と後とで  
時代を分断して見ることもできるだろう

自分の歴史をどこで分けるかも  
自分を見る目がそれを決める

自分を連続させるか分断させるか  
今生のなかでそうするか  
今生と前の生とでそうするか  
それも自分の目がそれを決める

その目がどこに向けられているか  
それを問うことを忘れたとき  
歴史はただ与えられたものになってしまうだろう